神戸新聞 2016年07月17日 日曜日 面名 阪神 １４ 27ページ

文学作品通し戦争学ぶ

芦屋市民センター

戦後71年

野坂昭如さん、遠藤周作さん…

作家の野坂昭如さんや遠藤周作さんらの作品を通し、戦争を学ぶ写真展「阪神間文学にみる　大戦下の街と暮らし」が16日、芦屋市民センターで始まった。計16作品に登場する戦時中の阪神間の様子などを、シーンの抜粋や当時の写真などで紹介する。（土井秀人）

芦屋市なぎさ町、8月5日の終戦の日に合わせて開催した。戦時中、阪神間に縁

地図などを使い、作家と阪神間のつながりを紹介する展示＝いずれも芦屋市業平町

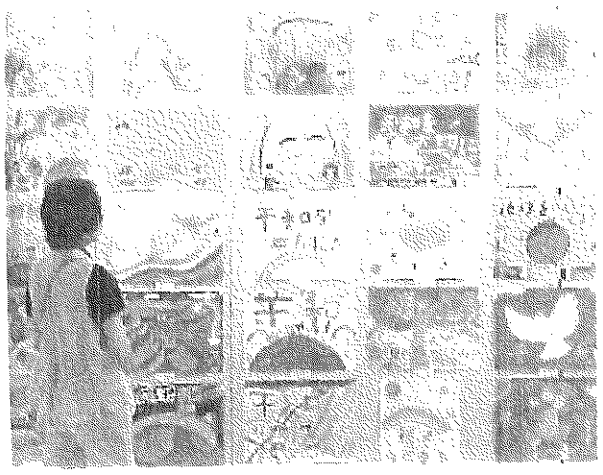
16作品 描写の抜粋や写真展示

著名な作家が多くとらし、その体験は作品に反映されている。例えば遠藤さんは、川西市の聖心女子学院の生徒だった。小説「白い人」は、その体験を基に描かれたシーンを登場させている。

野坂さんは神戸大空襲などの体験を「ひとでなし」「わが桜島の詩」で描いた。陸軍家須賀敬子さんやSF作家小松左京さん、イラストレーター中川紀夫郎さんらの作品も並び、多様な作家と阪神間とのつながりも知ることができる。このほか、カトリック四川教会の神父で、ゾルゲ事件に連座させられた「アスケ神父」の肖像画も展示している。

また同センターでは、小学生が描いた平和ポスター展も開催している。いずれも8月15日まで。

児童の平和ポスター展も



小学生の描いた平和ポスター

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

戦争末期、西宮の教会で布教

沈黙貫いた神父 「獄中記」初公開

戦時中、スパイ容疑で拷問を受けたカトリック夙川教会（西宮市霞町）の主任司祭アルフレッド・メルシエ神父（1905～77年）が〝獄中記〟を残していた。同教会の建堂80周年記念誌（2012年）で初めて明らかにされた。同教会で閲覧でき、知られざる戦争の証言に、教会外からも関心が寄せられている。（田中真治）

アルフレッド・メルシエ神父

仏側スパイ容疑、3カ月拷問

神父は1945年5月7日、尼崎の憲兵隊に連行され、終戦まで自由を奪われた。体験を生涯語ることはなかったが、パリ外国宣教会の求めに、部外秘を条件として報告書を提出。没後30年以上たったことから、特別に邦訳掲載が許可された。

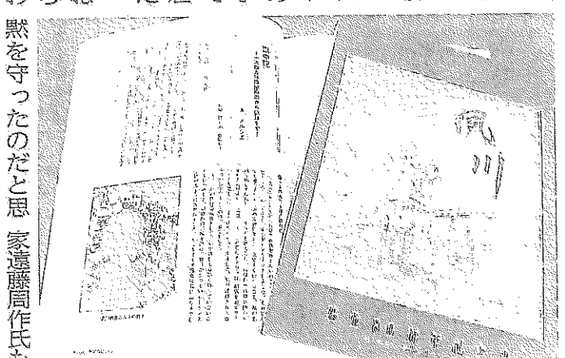
報告書によると、敵国のフランス大使館から夙川周辺の情報収集を命令されたとの容疑で憲兵は自白を強要。「自分の考え方が変わった」と告げられた。

信徒たちが救出に奔走したことも知られ、主義の過ちを許し、沈黙を守ったのだと思う」と同教会の梅原彰神父(78)は話す。

メルシエ神父の受難と沈黙については、同研究所員(65)＝西宮市＝は今夏、芦屋市民センターで「阪神間文学に見る大戦下の街と暮らし」展を企画したことをきっかけに、記念誌編集委員の五島真理さんから報告書の存在を知らされた。

「戦後数十年たってようやく明らかになった重い事実で、広く伝える意義がある」と蓮沼さん。今回の展示では、同じく連行されて命を落とした同教会創立者シルヴァン・ブスケ神父にスポットを当てたが、「メルシエ神父についても今後取り上げたい」と蓮沼さんは話す。

回展は15日まで。6日午後2時から同センターで五島さんの講演会がある（当日先着60人）。無料。同センター☎0797・35・0700



カトリック夙川教会建堂80周年記念誌に、25ページにわたり掲載されたメルシエ神父の獄中記

京つけもの 大安（だいやす）
本店：京都・平安神宮東
0120-05-7172 http://www.daiyasu.jp

阪神

戦時下の暮らしを知る

芦屋 阪神間文学集めた企画展

太平洋戦争中に阪神間に住んだ作家の文章から、戦時下の暮らしを読み取る企画展「阪神間文学にみる大戦下の街と暮らし」が、芦屋市業平町8の芦屋市民センターで開かれている。15日まで。

展示では野坂昭如や遠藤周作、小松左京、須賀敦子などの作品を取り上げた。夙川カトリック教会（西宮市）や、戦時下でも営業を続けた喫茶店「ラ・パボーニ」（西宮市）などについては複数の作家が言及したり、通ったりし、関心を集めていたことがうかがえる。

野坂は「ひとでなし」の中で、1943年にスパイ容疑で逮捕され死亡した夙川カトリック教会の創立者、シルベン・ブスケ神父（1877～1943）に触れた。実際には逮捕後間もなく亡くなったが、憲兵が教会側に事実を伏せるよう要請。1945年7月に解放されたと記述している。遠藤も、夙川教会や川西航空機宝塚製作所（宝塚市）での空襲体験をつづった。小松は空襲で国鉄や私鉄が止まり、神戸から芦屋や西宮まで歩いた経験を書いている。

展示を担当した蓮沼純一さん(65)は「著名な作家の若い頃のつながりや、当時の体験を知ってほしい」と話している。午前9時～午後9時半（日曜は午後5時まで）。無料。問い合わせは芦屋市民センター（0797・31・4995）。【石川勝義】

企画展「阪神間文学にみる大戦下の街と暮らし」で展示されているブスケ神父の肖像画＝芦屋市民センターで

絵画など通し平和を考える

芦屋で企画展

文学作品や絵を通して、平和について考える企画展が、芦屋市業平町の市民センターで開かれている。カトリック夙川教会（西宮市）の初代神父で、戦時中に連行されて命を落としたシルベン・ブスケ神父の肖像画などが並ぶ。15日まで。

ブスケ神父はフランスかな鋭い響きと地響きの中で私は工場を燃やす炎と煙を見た」と回想している。

午前9時～午後9時半。入場無料。13、14日は休館。問い合わせは同センター（0797・31・4995）へ。

展示されたブスケ神父の肖像画（芦屋市で）

小鼓教室:小学生の元気な音響く 芦屋 ／兵庫 - 毎日新聞

ドコモビジネスオンライン
www.docomo.biz
ドコモの法人向けサービスをご紹介！コスト削減やセキュリティ対策をサポート

【夏の高校野球】いなべ総合vs秀岳館　速報中

[PR]　バスクリン／男性向け薬用育毛剤がついに誕生

小鼓教室
小学生の元気な音響く　芦屋　／兵庫

毎日新聞 2016年8月9日　地方版
兵庫県　芸術・文化　カルチャー

元気いっぱいに小鼓の演奏をする児童ら＝兵庫県芦屋市立公民館で、山本未来撮影

芦屋市業平町８の市立公民館は３日、夏休みを活用して伝統芸能に触れてもらおうと「小鼓（こつづみ）教室」を開き、小学生１５人が参加した。能楽師大倉流小鼓方の大倉源次郎さんらが講師となり、小鼓が桜の木と馬の皮で作られていることや、「ポ」や「タ」といった言葉で表現される音の種類、打ち方、かけ声などを教わった。最後に、五穀豊穣を祈る能楽「三番三（さんばそう）」の一部を演奏。１年生の加納小鶴（こつる）ちゃん（６）は「重たかったけど、いい音がして楽しかった。習いたい」と話した。【山本未来】

〔阪神版〕

毎日

小学生小鼓教室
元気な音響く

芦屋

芦屋市業平町8の市立公民館は3日、夏休みを活用して伝統芸能に触れてもらおうと「小鼓教室」を開き、小学生15人が参加した。能楽師大倉流小鼓方の大倉源次郎さんらが講師となり、小鼓が桜の木と馬の皮で作られていることや、「ポ」や「タ」といった言葉で表現される音の種類、打ち方、かけ声などを教わった。最後に、五穀豊穣を祈る能楽「三番三」の一部を演奏。1年生の加納小鶴ちゃん(6)は「重たかったけど、いい音がして楽しかった。習いたい」と話した。【山本未来】

元気いっぱいに小鼓の演奏をする児童ら＝芦屋市立公民館で

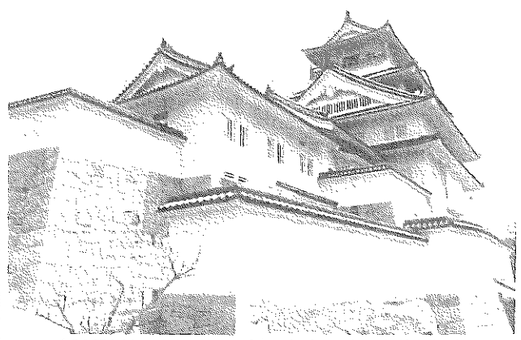
河内　厚郎の
文化回廊

大学博物館シリーズ講座開講中

大学博物館から講師を招いたシリーズ講座を芦屋市公民館の「芦屋川カレッジ大学院」で開講中だ。昨年の古典の日（11月1日）に行われた大阪青山歴史文学博物館・小倉嘉夫主任学芸員の講演会が好評だったので、今年度は関西学院大や園田学園女子大など近隣大学の協力を得て通年の講義とした。

北摂の地、源氏一門のふるさとを走る、能勢電車。「絹延橋」「滝山」「鶯の森」「鼓滝」……。風雅な駅名が続き、「一の鳥居」駅が近づくと草窓に美しい天守閣が見えてくる。川西市長尾町の大阪青山歴史文学博物館だ。母体の大阪青山大学のキャンパスは、大阪府箕面市にある。ここは、『土左日記』写本（多くの古写本では「土左日記」とあり、定家本の奥書「有外題　土左日記　貫之筆」によれば、紀貫之の自筆で「土左日記」という書名があったことになる）や、藤原定家の『明月記』など、約5000件の文書・典籍・美術工芸品を収蔵し、国宝が1件、国の重要文化財には16件が指定されている。国宝を有する大学は指で数えるほどだ。

ホンモノの学術標本の収集・保管・活用、特定分野を深く掘り下げた専門性、母体となる高等教育機関との連携……。さまざまな利点を持つ大学博物館は、高等教育の専門的情報を社会に提供する場であり、生涯学習の高度化に欠かせぬ知的インフラとなりつつある。



城郭建築を採用した大阪青山歴史文学博物館

まち宝物

芦屋市民センター

こだわりの空間 随所に

邸宅や教会などが立ち並ぶ芦屋川沿いで一際目立つコンクリート打ちっ放しの建物。市民活動や講演会などが催される芦屋市業平町の芦屋市民センター本館と大ホール（ルナ・ホール）は、建物そのものにも見所が多い。

いずれも日本を代表する建築家・坂倉準三の事務所の設計で、建築ファンがよく訪れている。

坂倉は世界遺産への登録が決まった国立西洋美術館（東京）の設計で知られるル・コルビュジエの弟子で、同美術館の建設にも携わった。

1963年に開館した本館は、建物を支柱で持ち上げる構造や、自然光を採り入れたデザインなど、同美術館に通じる特徴がある。「建設当時は斬新すぎて違和感があった」と話す市民もいるが、今では芦屋らしい景観として親しまれている。

「コルビュジエの建築を連想させる」と、建築ファンたちに人気なのが廊下だ。大小さまざまな飾り棚が埋め込まれた白い壁は、形の異なる窓を壁に配置したコルビュジエの代表作、ロンシャンの礼拝堂（フランス）を思わせる。

芦屋市出身の三宅正弘・武庫川女子大生活環境学部准教授（都市計画）は「コルビュジエの建築にみられる様々な特徴を、一つの建物で見ることができる面白い場所」と話す。

一方、70年に開館し、演劇やライブなどが催される大ホールのホワイエ（ロビー）は、黒い床や壁、天井を貫くように横切る白い線が目を引く。

芦屋を拠点に活動し、世界的に知られた前衛美術グループ「具体美術協会（具体）」のリーダー・吉原治良（じろう）が手がけたもので、斬新なアイデアにあふれた空間は、訪れた人たちを非日常の世界へといざなう。

舞台や客席は黒で統一。センターによると、落語家の桂米朝はかつて、ホールで初めて独演会を開き、地獄が舞台の演目を披露した際、「何やこのホールは薄暗くて、地獄の一丁目のような気のするところや」と述べたという。

本館の多目的ホール前には、具体のメンバーで、画家の白髪一雄が手がけた抽象画「芦屋」が飾られている。自然豊かな風景を思わせる緑が基調の作品で、今年新たに修復された。作品の前では、年配の人が世間話をしたり、子供たちが遊んだり。高田浩志センター長は「魅力的な建物や芸術に気軽に触れてもらえる場所。インテリアも含めていろんな見所を楽しんでもらえたら」と語る。

随所にこだわりが詰まった空間は、開館から半世紀が過ぎた今も、人々の日常にささやかな彩りを添えている。

（藤本幸大）

芦屋川沿いに立つ芦屋市民センター。右が本館、左が大ホール

(上)ル・コルビュジエの建築を連想させる飾り棚のある本館の廊下(中)黒を基調とした床や天井などに白線が走る大ホール（いずれも芦屋市で）

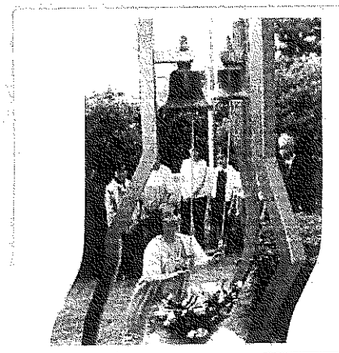
2016・8・24

神戸新聞NEXT｜阪神｜平和への願い込め鐘鳴らす　芦屋で戦争伝え… 1/1 ページ

神戸新聞NEXT

2016/8/15 22:20　神戸新聞NEXT

平和への願い込め鐘鳴らす　芦屋で戦争伝える催し



「優愛の鐘」を鳴らす参加者ら＝芦屋市民センター　拡大

ふかし芋などを食べながら戦争体験に耳を傾ける参加者ら＝芦屋市民センター　拡大

戦時中の記憶を伝え、平和の大切さを語り合う式典「平和のを鳴らそう」が１５日、芦屋市民センター（兵庫県芦屋市業平町）で開かれた。参加者は正午に合わせて鐘を鳴らし、平和へ願いを込めた。

同市と芦屋ユネスコ協会などの主催。毎年、「終戦の日」に合わせて開催し、今年は約６０人が参加した。

集まった市民らは正午のサイレンに合わせて黙とう。センター敷地内にある「優愛の鐘」を打ち鳴らすと、ふかし芋やおにぎりを食べ、戦争体験者の言葉に耳を傾けた。

陸軍将校だった父親の写真を持参した芦屋市東山町の女性（７９）は父親が「勉強がんばりなさい」と書いてタイから送ってきた写真を披露。また、父親を亡くしたという女性は自身の経験から「絶対に平和を無くしてはいけない」と訴えかけた。

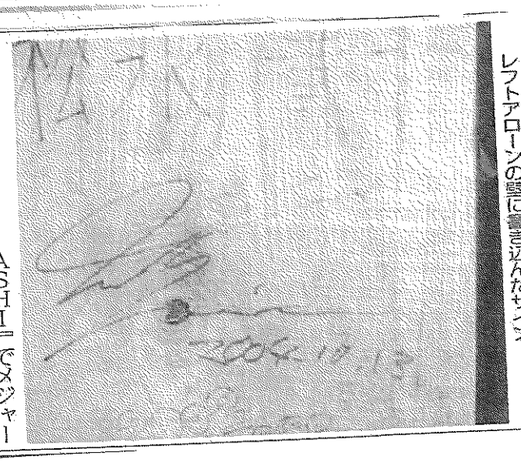
芦屋市春日町の男性（８６）は孫２人とともに参加。「終戦の日に来ることで、孫たちに何かしら感じてもらいたい。記憶に残すことが私の役割」と話した。（篠原拓真）

神戸支局　神戸市中央区栄町通4の3の5　〒650-0023　☎078(371)3221　FAX078(371)7615　kobe@mainichi.co.jp
阪神支局　尼崎市東難波町5の16の29　〒660-0892　☎06(6482)1221　FAX06(6482)5456　hanshin@mainichi.co.jp
【主な通信部】丹波通信部　079(552)0388
【購読問い合わせ】　0120-468012
姫路支局　姫路市三左衛門堀東の町102　〒670-0949　☎079(282)1221　FAX079(288)2330　himeji@mainichi.co.jp
豊岡支局　豊岡市元町10の6　〒668-0026　☎0796(22)6331　FAX0796(23)5188　toyooka@mainichi.co.jp
淡路支局　洲本市本町3の1の40　〒656-0025　☎0799(22)1360　FAX0799(24)1360

兵庫

河内厚郎の文化回廊

31日、芦屋で松永さん里帰り公演



松永さんがプロのミュージシャンになった時、レフトアローンの壁に書き込んだサイン

私が行くライヴハウスは、日本旅館の建物を再生させた神戸北野坂の「ソネ」、名門ナイトクラブの伝統を引き継ぐ阪急武庫之荘の「ライブスポット アロー」、そして、歌舞伎俳優や映画監督の常連もいる芦屋の「レフトアローン」となる。

小学生の頃、レフトアローンの柱にプロのジャズピアニストになる決意を書きこうとした松永貴志さん(30)は、13歳で巨匠ハンク・ジョーンズに絶賛され、17歳のときにアルバム『TAKASHI』でメジャーデビューをはたし、ベストセラーとなった。米ブルーノートレーベル史上、最年少リーダー録音記録を樹立するという快挙であった。18歳で作曲・演奏したテレビ朝日系「報道ステーション」のテーマ曲でも注目を浴び、その後も報道番組の作曲・演奏を数多く手がけてきた。

8歳のとき芦屋の自宅で阪神・淡路大震災を経験した松永さんは、「東日本大震災チャリティーコンサート～芦屋から被災地へ」を自ら企画、公演の収益全額を寄付している。

31日(日)、芦屋市ルナ・ホールで松永さんの里帰り公演が行われる。問い合わせは、0797・35・0700、午後3時開演、前売3000円・当日3500円(全席指定席)。

神戸新聞 2016年07月03日 日曜日 面名 阪神 14 25ページ

ジャズピアノの松永さん古里公演

芦屋で31日

躍動的な演奏で世界的に活躍する芦屋市出身のジャズピアニスト・松永貴志さん(30)のライブが、31日午後3時から、同市業平町のルナ・ホールで開かれる。

松永さんは17歳でデビューし、ピアニストのハービー・ハンコックさんとの共演などで注目を集めた。米国の名門ブルーノート・レーベルからアルバムをリリース。日本では、報道番組のテーマ曲を作曲するなど幅広く活躍している。

当日はトランペット、ベース、ドラムスとのカルテットで演奏。スタンダード曲や、阪神大震災の被災経験から、復興した神戸の街をイメージして作曲した「神戸」などを披露する予定。入場料3000円(当日3500円)で、同市役所や市民センターなどで販売。

よみうり伊丹文化センターだより

072(775)3001

よみうり伊丹文化センター（伊丹市中央1）は23日午前10時30分～11時40分、「学研・夏の特別科学実験教室」を開催する。

実験ロボットを組み立て、身近にある空気の性質を様々な実験を通して学ぶ。夏休みの自由研究に役立てることもできる。

年長～小学生対象。2484円（教材費含む）。

Eメール itami@ovbc.co.in

神戸新聞 2016年08月01日 月曜日 面名 広域 13 22ページ

ピアニスト松永貴志さん

地元で華麗な演奏

芦屋

芦屋市出身のジャズピアニスト松永貴志さん(30)のコンサートが31日、同市業平町の市民センター「ルナ・ホール」と同市潮見町の高齢者総合福祉施設「あしや喜楽苑」で開かれた。同施設では、入居者や市民ら約60人が華麗な演奏に聞き入った。

松永さんは同市内で阪神・淡路大震災を経験。自宅が半壊するなどの被害を受けた。17歳でメジャーデビューし、演奏活動に加え、報道番組やCMのテーマ曲制作など、幅広く活躍している。

あしや喜楽苑では、実家近くの宮川をイメージして作曲した「ナイト・リヴァー」や、夜景を題材にした「神戸」など、オリジナル曲を中心に計6曲を披露した＝写真。

観客は演奏に引き込まれ、アップテンポな曲では自然と体でリズムを取る姿も。同施設の入居者で、自身もピアニストの横井和子さん(96)は「観客に呼び掛けるような親しみ深さを感じた」と話した。

（太中麻美）

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

神戸新聞 2016年07月27日 水曜日 面名 阪神 １４ 27ページ

弥生の会下山遺跡テーマに 来月20日シンポ

芦屋

弥生時代に築かれた高地性集落跡「会下山遺跡」（芦屋市三条町）をテーマにしたシンポジウム「会下山遺跡と高地性集落の謎―弥生人はなぜ山の上に住んだのか」が8月20日、芦屋市民センター「ルナ・ホール」（業平町）で開かれる。

同遺跡が発掘調査から60年、国史跡に指定されてから5年を迎えたのを記念して企画。

会下山遺跡は、六甲山の尾根や斜面に広がる弥生時代の高地性集落で、1956年に発掘調査が始まり、60年に県史跡、2011年には国史跡に指定された。

斜面全域に遺構があり、竪穴住居や祭場跡、掘跡などが出土。大規模な集落が300年近くの長期間にわたって営まれ、流通の面でも先進的なムラであったとみられるという。

シンポでは、最初の調査に参加したという石野博信・県立考古博物館名誉館長が記念講演。その後、大阪大大学院の福永伸哉教授らが同遺跡の歴史的価値や他の遺跡との違いなどを語る。

午後1時から。無料。定員600人。申し込みは8月5日必着で往復はがきに、住所、氏名、年齢などを書き、〒659―0068 芦屋市業平町8の24、芦屋市公民館（☎0797・35・0700）に郵送する。

（前川茂之）

神戸新聞 2016年08月21日 日曜日 面名 広域 １３ 26ページ

芦屋・会下山遺跡発掘60年シンポ

弥生人の生活様式探る

歴史学者5人が白熱討議

弥生時代に築かれた国史跡「会下山遺跡」（芦屋市三条町）の発掘60年を記念したシンポジウムが20日、同市業平町のルナ・ホールで開かれた。「弥生人はなぜ山の上に住んだのか」をテーマに、5人の歴史学者が白熱した議論を繰り広げた。

同遺跡は、山の斜面から竪穴住居や祭場跡などが出土した高地性集落跡で、1956年に発掘調査が始まり、60年に県史跡、2011年には国史跡に指定されている。

シンポではまず、第1次調査に参加した石野博信・県立考古博物館名誉館長が講演。「炎天下の中、上半身裸になって必死に掘った思い出がある」と振り返った後、祭場の構造が沖縄地方と類似していると報告書に記したことなどを明かした。

パネル討論では、遺跡が山頂にあった意味について議論。大阪大大学院の福永伸哉教授らは「当時は鉄器の交易が始まった時代。大阪湾を行き交う交易船を監視するために、山頂に居住したのでは」とした上で、食糧が乏しい高地性集落に、食糧を供給していた低地性集落があったはずとの見方を示した。

これに対し、石野名誉館長が反論。「山を歩き回った経験から、会下山に大規模な集落があったようには思えない。周辺集落との関連も含め、もっと調査を尽くすべきだ」と意見し、来場した約520人の歴史ファンらも大きくうなずいていた。

会下山遺跡の意義などについて議論する専門家＝芦屋市業平町

くらしナビ　カルチャー

関西遊覧

文化育む場所

未来のあるべき社会像を研究・提言している大阪ガスの社内組織「エネルギー・文化研究所=略称・CEL（セル）」（大阪市中央区平野町4、小西池透所長）が今春、設立30年を迎える。11人の専任研究員がおり、時宜にかなった特集、研究成果の報告、外部識者の寄稿などから成る雑誌『CEL』（年3回発行）は誌面内容の充実ぶりが定評だ。同研究所は、時代と共に移りゆく世相や価値観をどのようにとらえ、社会に還元しようとしているのか。研究所の内側をのぞくと共に関係者の思いを聞いた。　【有本忠浩】

世相読み提言30年　大阪ガスエネルギー・文化研究所

未来の形 生活者目線で

駅直結の拠点

先月の下旬、CELの情報交流・発信拠点として2013年5月にオープンした「都市魅力研究室」を訪ねた。

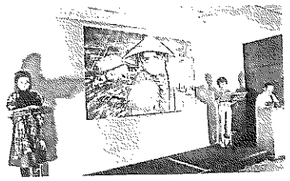
JR大阪駅に直結する「グランフロント大阪」のナレッジキャピタルタワーにある約180平方メートルのフロアは、シンポジウムや講演会、ワークショップができるセミナールーム（30席）、サロン（14席）を備えている。

夜7時、ここで法政大自然科学センター長の小池晨郎教授によるセミナーが催された。「さいえんすかふぇ・えねるぎぃっ亭」と銘打ち、昨年5月から始まった連続セミナー。この日のテーマは「核エネルギーって何だろう」。聴講者は35人。大学生、サラリーマン、公務員、主婦、職員ら多彩な顔ぶれだ。

小池教授は、エネルギー保存の法則などに触れながら将来の課題に言及。「産業革命以来、主流エネルギーは石油、石炭など化石燃料。100年先には太陽光や水力など自然エネルギーが今以上に求められるだろうが、それだけで今の生活を維持するのは無理が生じる。考える手がかりになるのが東洋思想、例えば老子です。このことは次回（2月19日開催）お話しします」と締めくくった。終了後は隣のサロンで名刺交換やワイングラスを手に談笑する光景が見られた。

ユニーク公演

CELは1986年4月、同社の創業80周年記念事業の一つとして設立された。研究分野は「食・住まい」▽「都市・コミュニティ」▽「エネルギー・環境」▽「社会・生活・文化」。「食・住まい」分野の山下満智子研究員は、かつて東北大の川島隆太教授と共同で「脳科学的アプローチによる『調理』研究」をテーマにした。「夕食のメニューを考える」「食材をめめる」「磨りつける」といった過程の脳活動を近赤外線で計測した結果、左右の大脳半球の前頭連合野の活性化が確認された――などの報告をした。今も食文化の探求の他、子供の情操教育、高齢者の認知症予防と料理療法などの研究を深めている。



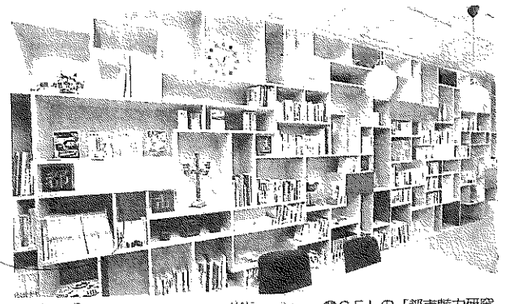
芦屋で27日「語りベシアター」

「語りベシアター」が今月27日午後3時、兵庫県芦屋市業平町のルナ・ホールで開かれる（写真は過去の公演から＝CEL提供）。同市主催の芦屋文学サロンの一環。「在原業平と芦屋」と題し、朗読、音楽生演奏、舞踊などを取り合わせ公演。入場料1200円（前売り1000円）。同ホール事業担当（電話0797・35・0700）。

「語りベシアター」と、「脳科学的アプローチによる『調理』研究」をテーマにした。「夕食のメニューを考える」「食材をめめる」「磨りつける」といった過程の脳活動を近赤外線で計測した結果、左右の大脳半球の前頭連合野の活性化が確認された――などの報告をした。今も食文化の探求の他、子供の情操教育、高齢者の認知症予防と料理療法などの研究を深めている。

「都市・コミュニティ」分野の栗本智代研究員は、都市文化の価値の再認識と活用をテーマに、「語りベシアター」という名の取り組みをしている。街の歴史、文化などを掘り起こし、魅力を広く伝え、住民の元気を取り戻す一助になることを目指す。具体的には関西についての物語、エピソードをシナリオ（語り）、映像、音楽出演を通じて公演する。これまでに「曽根崎心中考」「夫婦善哉考」織田作之助の世界」「梅田は西からやってきた」ターミナル開発物語」など興味を引かれるものばかり。栗本研究員はシナリオ作りと語り部役を担っている。

活動を側面から支えている志波徹主席研究員はシナリオのユニークさ、巧みな演出のおかげで固定ファンも多く好評をいただいています」。課題は、物語の素材を関西一円に広げること。後継者育成という。



CELの「都市魅力研究室」。交流や情報交換の場として利用されている小池晨郎・法政大教授が講師を務めた「都市魅力研究室」のセミナー＝いずれも大阪市北区で、川平愛撮影

「都市魅力研究室」は、イベントなどがある場合以外は、原則非公開。『CEL』は有料だが、最新号（2015年11月号、特集は「生活者から見る〝スマート〟」）を希望者に無料で提供する。CEL（06・6205・3511）へ。

雑誌通じ発信

『CEL』の創刊は97年2月で当初は季刊でスタート。特集テーマの設定・編集の方針は、「絶えず社会に対し一歩先からの視点を提供すること」。創刊号の特集は「火」。石毛直道・元国立民族学博物館長（対談当時は同館教授）と同研究所の倉光弘己・初代所長との対談▽「火の生活文化史」▽「火の博物館」――など読み応え十分の誌面だった。なお、1月から女性の専任編集長が着任し、次年度以降の誌面も楽しみだ。

小西池所長は今後のありようについて、「研究所と同じ歩みを重ねる『CEL』と、都市魅力研究室の立地条件を生かしながら、生活者の思いと目線を忘れずに研究の成果を社会に還元していきたい」と話す。

＝次回は3月1日掲載

24年ぶり芦屋で上演

ゆかりの在原業平描いた日本舞踊

420人 幽玄の世界に酔う

芦屋市ゆかりの歌人在原業平を描いた日本舞踊「小槌業平」が27日、24年ぶりに芦屋市業平町のルナ・ホールで再演された。地元の舞踊家らが市内に伝わる「打ち出の小槌伝説」と絡めて創作したが、上演されたのは過去たった2回だけ。六歌仙の思いを表現した幽玄の舞に約420人の観客が酔いしれた。

「小槌業平」は、西宮市の演劇評論家河内厚郎さん(63)が1992年、「業平の魅力を伝えたい」と企画。芦屋市高浜町の邦楽演奏家、清元延柳さんらが作曲して完成させた。

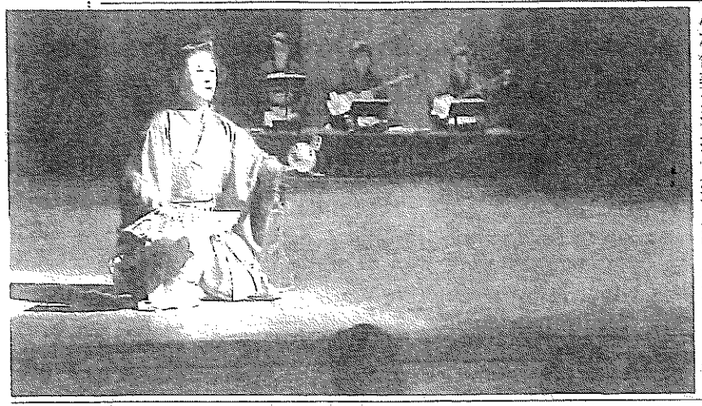
24年ぶりに地元で披露された「小槌業平」＝芦屋市業平町

同6月にあった同ホールの初演では、日本舞踊家の花柳寛十郎さんが優美な演技を披露。「新たな業平像を追究した」と話題を呼び、国立文楽劇場でも上演された。その後、再演に向けたムードが一時高まったが、95年に阪神・淡路大震災が発生、中断を余儀なくされた。

24年ぶりの再演は河内さんが呼び掛けて実現。初演同様、花柳さんが業平役、清元さんが三味線を務めた。

ストーリーは、業平が最愛の藤原高子と駆け落ちしたものの、追手に仲を裂かれ、芦屋の別荘で傷心の日々を過ごすとの設定。沖で見つけた打ち出の小槌を振ると高子が現れる。

三味線の音色とともに、しっとりとした舞が披露されると、神戸市長田区の島中弘一さん(78)は「業平の悲しみや喜びが伝わってくる」と感じ入った様子。河内さんも「今度こそ、芦屋にこの舞踊を根付かせたい。新しい創作舞踊もつくっていければ」と手応えを感じていた。（前川茂之）



芦屋ゆかり歌人題材

日本舞踊「小槌業平」

27日、ルナ・ホール

芦屋市ゆかりの歌人・在原業平を題材にしたオリジナルの日本舞踊「小槌業平」が27日、初演から24年ぶりに同市業平町のルナ・ホールで披露される。業平町、打出小槌町など市内に残る町名にちなみ、小槌にまつわる伝説を絡めながら、恋と歌に生きた業平の生き様を描く。

芦屋市と同市教委が主催。作品は同市の邦楽演奏家・清元延柳さんが作曲、日本舞踊の脚本などを手がける芦川照葉さんが作詞を担当した。

日本舞踊家の花柳寛十郎さんが自ら振り付けを考え、1992年に同ホールで初演。月の下、小槌を拾った業平が、別れた恋人の姿に変身して踊るシーンが見所という。

地元で2回目の上演となる今回も、清元さんの三味線などに合わせ、花柳さんが踊りを披露する。音楽に合わせ、芦屋と業平との縁を紹介するコーナーもある。

企画した西宮市在住の評論家・河内厚郎さんは「芦屋の歴史や伝説に着想を得たユニークな作品。美しい舞踊を楽しんでほしい」と話している。

午後3時開演。入場料1200円（当日）。問い合わせは同ホール（0797・35・0700）へ。

河内厚郎の文化回廊

日本舞踊・花柳流のお家騒動 ㊦

「夙川の師匠」と呼ばれた、花柳芳瞳（四世花柳芳次郎、1903～1971）は、山村流など地歌舞の流派が盛んだった大阪や神戸で花柳流を広めることに成功し、多くの門下生を育てた。私が一緒に仕事をした花柳寛十郎さんや花柳禮旻さんなど、関西で花柳姓を名乗る舞踊家のほとんどは、その流れをくむ。

芳瞳の長男で、宝塚歌劇の振付なども手がけた花柳寛氏(85)は、実子のなかった花柳流家元三代目の葬儀（2007年）の場で、みずからが四代目を襲名すると発表し、家元の座に就いた。これに対し、三代目の遠縁である青山貴彦氏(40)が「（自分が）三代目から後継指名されていた」と抗議して除名されてしまったことが、このたびの花柳流お家騒動の発端である。

東京地裁は「四代目就任を強引に推し進めた側面は否定しがたく、青山氏が疑問を呈するのは相応の理由があった」と指摘し、青山氏に花柳流の名取としての地位を認めはしたが、寛氏の家元としての正統性は否定しなかった。寛氏は自分の孫に家元を継承させるべく着々と手を打っており、流れを変えるのは難しそうだ。誰に次の家元を継がせるか、先代が文書にして残していなかったせいでもある。

芦屋を舞台にした創作舞踊「小槌業平（こづちなりひら）」を踊る、花柳寛十郎さん＝芦屋市業平町のルナ・ホールで、今年2月（岩城則子氏提供）

毎　日

復興への思い 歌で

熊本出身のソプラノ歌手、六車智香さん（芦屋市）による「六車智香おしゃべりコンサート」が11日、芦屋市業平町8の芦屋市民センタールナ・ホールで開かれた。コンサートは約1年前から予定していたが、熊本地震が発生したことを受け、急きょ被災地への義援金を呼びかけるチャリティコンサートとして開いた。【石川勝義】

熊本出身の歌手・六車さん 芦屋でコンサート

チャリティーコンサートで歌声を披露する六車さん＝芦屋市で

「少しでも力になりたい」

六車さんは熊本県水俣市出身で、大阪音楽大学声楽科を卒業。現在は「六車智香　声楽の会」を設立し、毎月第1～3水曜日に芦屋市立公民館の公民館講座で歌を教えている。

この日のコンサートでは、クラシックの「歌の翼に」やオペラの「ラ・ボエーム」などを披露。自身が熊本出身で、熊本市内に住む叔父の自宅が半壊したことなどに触れ、「熊本の状況を伝えるテレビの前でじっとしていると、涙が止まらなかった。少しでも力になりたいと思い、義援金の箱を置かせてもらった」と述べ、寄付を呼びかけた。

集まった寄付金は日本赤十字社を通じて被災地支援に役立てられる予定。六車さんは「皆さんから『チャリティーコンサートにしては』と提案していただき、ありがたくお受けした。少しでも熊本の力になれればうれしい」と話した。

神戸新聞 2016年05月04日 水曜日 面名 阪神 １４ 23ページ

多文化共生考えよう

14日、芦屋でフォーラム

多文化共生を考える国際フォーラム「音楽とトークで紡ぐ芦屋の未来」が14日、芦屋市業平町のルナ・ホールで開かれる。米大リーグのダルビッシュ有投手の父ダルビッシュセファット・ファルサさんらが出演。誰もが暮らしやすい社会について語り合う。

芦屋市などの主催で、武庫川女子大学の三宅正弘准教授が「フランスの子どもたちから学ぶ平和」と題して講演。その後、ファルサさんのほか、孫文記念館（神戸市垂水区）の愛新覺さん、ペルシャ料理研究家のダリア・アナビアンさんを交えた座談会で、来日後に感じたことなどを話し合う。

第2部では、阪神間の子どもたちが世界のあそび歌を披露。イランの民族楽器「サントゥール」や中国の民族楽器「二胡」の演奏もある。

入場料千円。午後2時開演。市民センター☎0797・35・0700

2016年(平成28年)4月17日(日曜日)　讀賣新聞

音楽とトークで 多文化共生考える

芦屋で来月14日 外国人にも住みやすい都市など企画

フォーラム「音楽とトークで紡ぐ芦屋の未来」が5月14日、芦屋市業平町のルナ・ホールで開かれる。「国際文化住宅都市」を掲げ、外国人も多い同市で、多文化共生のあり方を考えようと市などが企画した。

第1部では、米大リーグ・レンジャーズのダルビッシュ有投手の父でイラン生まれのファルサさんや、孫文記念館（神戸市）館長の愛新覺さんらが「阪神間における多文化共生」をテーマに討論。外国人が住みやすい社会にするための課題などを話し合う。

第2部では、イランの民族楽器サントゥールと中国の二胡の演奏や、子供たちによる世界の歌の披露がある。

午後2時開演。チケットは1000円で、芦屋市民センターや同市役所などで販売している。問い合わせは同センター（0797・35・0700）へ。

中浜町、7585388）▽午前10時～11時半、午後1時～4時半）▽歯科（ふれあい歯科診療所（午前10時～午後0時半）（火曜、7587388）

※急病が対象。変更される場合がありますので、必ず電話でお問い合わせ下さい